枕崎市制施行70周年記念式典の第2部は、シンガーソングライターの玉城ちはるさんによる「玉城ちはるトーク＆コンサート～命の参観日～」と題した記念講演が行われました。
その講演の内容を抜粋して紹介します。

玉城（たまき）ちはるトーク＆コンサート ～命の参観日～

※♪マークの部分は、玉城さんが講演の中で歌った曲です。

♪ひだまり

36人の子どもたち

私は、日本、中国、韓国、この三つの国の子どもたちと一つ屋根の下で共同生活を10年行いました。日本人は、お父さん、お母さんがいないという理由で養護施設で育ったり、お父さん、お母さんはいるけど、お父さんがお酒が好きで、お母さんが心の病気になってしまって、でも専門学校に行ってみたい、大学に行ってみたい、だけど自分で学費を払うと生活できない、そういう子を東京の自宅に招き入れて、10年間、約36人の子に「ママ」と呼ばれながら共同生活をしました。

とは言え、日・中・韓、この三つです。私たちは、歴史も文化も違います。いつも喧嘩は絶えません。でも、自分と違うからといって、誰かを排除することはできません。寄り添って生きていくしかありませんでした。

命の参観日

今日本は、自殺率が減ったと言われていますが、実はこの3年間、ずっと増加している自殺率があります。19歳以下の年齢です。昨年だけで599人の若者が亡くなりました。そんな彼ら、彼女らの生きづらさの一つには、「あの子変よね」「あの子おかしい」とか、「僕がおかしいのかな」「どうしてわかってもらえないんだろう」、そういったさまざまな違い、誰かを排除するような、排除されるような、そういったことが要因でいじめになり、生きづらさを感じ、亡くなってしまうということが原因の一つにあります。

私は、全国の小・中・高・大学を回って、子どもたちに自分とは違う人を排除しないで、一つ屋根の下で約36人の子どもたちと私がどう共同生活をしたか、そのお話をしているのが「命の参観日」です。

ご飯を食べ残す中国人の息子

初めて中国人の息子を預かった時、こんなことがありました。私たち日本人はご飯を食べる時、「もったいない」と言ったり、作ってくれた人への礼儀として、食べ切るようにしています。ですが、中国人の息子は、いつも食べ残すんです。「私の料理がまずいんかな」って思いました。でも、頑張って作り続ければ、気を遣って食べてくれるだろうと思ったんです。だから、頑張って毎日作りました。だけど、やっぱり食べ残すんです。「何で失礼な人なんだろう」、私は少しずつ彼を嫌いになりました。ある日、彼が残したものを食べました。そしたら、うちの息子が言うんです。「あっ、ママ、どうして私残したものを食べますか？汚い」。そう言われた時、私の中で何かがはじけました。「日本ではね、食べ切らんと失礼なんよ。まずくっても気遣って食べてぇや」と、私は泣きながら彼を責めました。そうすると、うちの息子はポカンとした顔で言ったんです。「ママは中国のこと何も知らない」って。

最近、ニュースなんかで、中国人観光客の食べ方が汚いとか出ますが、彼らは少し食べ残します。食べ切ることが失礼になるからです。「ママのおもてなしは素晴らしい。食べ切れないくらい、あなたのおもてなしは素晴らしかった。お腹いっぱいだ」、そう感謝をして、彼は食べ残してくれていました。

その時、私は自分が受けた教育、自分が持っている価値観だけが正しいと思って、泣きながら人を責めてしまう人間なんだということを初めて知りました。

何が問題だったのか。会話です。これが共通認識だろう、これが常識だろう、そう思っておかしいなと思った行動に対して質問せず、自分の思いを伝えず、彼だけを責めてしまった。自分で言葉にしなければならないんです。「僕は私はこれは嫌だ」「これはありがたい」、やはり言葉にして、参加して、一緒に課題を解決しないと分からないことが、生活の中で毎日ありました。そして、毎日必ず話合って、課題を解決していきました。

▲会場の皆さんで「優しさ貯金ゲーム」

♪ヒトリゴト

優しさ貯金ゲーム

我が家では喧嘩をした時、「優しさ貯金ゲーム」というゲームをして仲直りをします。手を取り合い、相手の直してほしいところと良いところを言います。そして、見つめ合って、「ありがとう」「ごめんなさい」「大好き」って言うんです。

人って、手をつないだ距離感で「バカ」とか「死ね」とかって言えないんです。直してほしいところばかり言われると、「私のこと嫌いなんかな。嫌いじゃけぇ、あんなに攻めるんかな」って、そう思うんですね。でも、良いところも言われると、「私を嫌いなんじゃない。直してほしいところを教えてくれたんだ」って、そう思うんです。大事なことを決める時、体温の伝わる距離で「ありがとう」「ごめんね」「大好き」、この感謝、謝罪、愛情を持って話し合うと、絶対に笑いが生まれるんです。

♪私は生きてる

父の死、自ら動き出す自分へ

私が16歳の頃の夏から、父は心の元気がなくなり、18歳になった時に自ら命を絶ちました。全国各地を回って、子どもたちに話す時に、「あなたは自ら動き出せる人であってください」と必ず言います。

私はずっと世の中を恨んでいました。「何で地域の人は助けてくれんのんじゃろう」「何でうちのお父さんだけ自殺したんじゃろう」。地域や近所や世の中を恨んで、周りのせいにして生きていました。

東京に行って、ある時出会った1人の中国人の女の子と一緒に暮らすようになりました。その子が「ママ、学校に家借りられない子がいるから、連れて帰ってきていい？」と言いました。全然売れない歌手として、どうやって家賃を払おうと思っていたけど、何となく「いいよ、一緒に暮らそう」、そう言って彼ら、彼女らのお母さんになりました。1人増え、2人増え、8人になって、いろいろなところに引っ越して、10年一緒に暮らしました。そんな中で私は、少しずつ変わっていったんです。

今度私がまた、あの時と同じくらい苦しい目にあっても、今度は必ず誰かが助けてくれるって信じられるんです。だって、私がやってるから。世の中を恨んだり、世の中の人は誰も助けてくれないと思ってた時は、私が世の中の人を誰も助けていませんでした。自ら動き出す人になって、必ず今度は私も助けてもらえる。

自分を信じられる人は、他人を信じられるようになります。他人を信じられる人は、他人を愛せるようになります。他人を愛せる人は、やっぱり周りから愛されるようになります。そうすると、自分を愛せるようになるんです。

私はLINEで子どもたちと繋がっています。多い日で約280通の相談がきていることがあります。「死にたい」「どうしたらお母さんに愛されますか？」、そんなやり取りを子どもたちとしています。「死にたい」という彼、彼女たちは、実は自分のことを愛せなかったりします。

お互いに助け合う場づくり

私は留学生、日本人の子のお母さんになって良かったと思っています。今日も表彰されていましたが、民生委員の方にお米を分けてもらったり、ホストマザーを始めた頃、助けてもらいました。だけど、誰かを助ける側に回ったら、自己肯定感が生まれました。

でも、助けることにも限界があります。少子高齢化で子どもは減っていくし、2025年までには在留外国人を34万5000人も増やします。多文化共生もしていかなければならない。また、知的障害、身体障害、精神障害の3障害、そして在留外国人、すべてにおいて、どう地域で共生していくか、これが多文化共生だと私は思っています。でも、私1人でも助けられないし、健常者や心が健康である人だけがずっと助け続けることも限界があると思います。

私は、うちの子に助けられていたんだと思います。彼らにご飯を作ったり、家を用意したけど、おかげで私は死にたいと思うことがなくなりました。私は結局、助けられています。お互い助け合うという形を作って、そういう取り組み、場づくりをしていくことが必要だと、私は思っています。

今日は本当に幸せな時間でした。どうぞ、皆さんも自ら動き出せる人であってください。

♪千年物語、♪笑い泣き

■問合せ　総務課秘書広報係　TEL72-1111（内線211）

●玉城ちはる プロフィール
1980年生まれ、広島県出身。シンガーソングライター。安田女子大学（広島県）非常勤講師。広島を中心に全国各地で平和イベントやボランティア活動を行っている。また、「自身に出来る社会貢献」として、アジア地域の留学生支援活動「ホストマザー」を10年間にわたって継続。その経験を生かし、現在、全国の地方自治体、学校、大学、企業で特別講師を務める。